悦田喜和雄と「新しき村」

富塚昌輝

はじめに

悦田喜和雄[1]「百姓は死んだ」(『徳島新聞』一九七一・四・二四～八・一六)は、自伝的要素を含む作品であるが、そこには悦田自身をモデルとする元吉の「新しき村[2]」への憧憬が語られる箇所がある。

春であったらしい。田はゲンゲの花ざかりであり、菜の花も咲いていた。なぜそんな春にしたかというと、元吉の家では百姓の仕事の方も麦の施肥も済み、まだ麦刈りまでには二カ月余りも間があるし、水田の仕事にも間のある、いそがしいといっても一番ゆったりした時であったからである。もし、これを父母たちが知ったらやめさせられるにきまっていたからであった。しかし、元吉としてはそれは急流の川の水のようにどうしてもそれを阻止することは出来ないまでになっていたのである。それは元吉の尊敬するあこがれの人から君の方によかったら来て見たまえ、という手紙をもらっていたからである。そしてそこへ行きさえすれば好きな文章が自由に書けるようになると思いこんでいたのである。またそこはおぼろな太陽の照るところでなく、明るいいつも三月の太陽のさんさんと照る、すべてのことが思うままになる、うぶ湯のようにからだを洗ってくれる、新しい村が手をすけて待っていてくれると思いこんでいたからである。何を見ても何を考えてもその底にあこがれの新しい村があるからである。空は曇り、雨が降りそうな今日も、日向の新しき村にはすべての草木も鳥も、レンゲの花や菜の花に集まるチョウやハチも、濃厚な太陽の光りの中で自由にたわむれている。その新しい村、今日家で畑の草取りをしているのも麦の最後の土入れをしているのも手足を動

かしているのは新しい村での働きに感じるのである。しかし、ここではその感覚だけなので、その感覚を眼前に寄せると、そのすべてを制止する家があり、その家は手足や精神までも包んでしまってすべての自由を束縛してしまって身動きが出来ない。これをぬけ出すことは家出である。元吉はそこだと家出に決めたのである。（一九七一・七・一〇）

人類の理想郷、新しき村、そこへ行って住むことが出来る。まだ見ぬ新しき村がきれいに見えて来る。（中略）早く眠ろう！　いい聞かせるようにつぶやく。また雑誌で見ている新しき村の精神が浮かんでくる。そこの道にはきれいな花が咲き川にはきれいな水が流れ、小さな魚がおよぎまわっている。明日か明後日にはそこへ行ける。そこで雑草のように伸び伸びと自我を完全に成長させる。（一九七一・七・一七）

二つ（「文章世界に投書してある木賃宿の朝と、婦人公論に女の名で投書してある、小夜子さんの失敗と私の悲しみ」―引用者）とも自信を持って雑誌の来るのを待っている。何度も古い雑誌を出して他の当選している人のものと見くらべて考えても確実に、二つは当選するというぬぼれはもっていた。今度の家出も、それによって自分のこれからのもの書きとして筆で生計が立てられる人間になれるかどうかといううらないのようなものもひそかにかけていたくらいなもので元吉としては決定的な自信のようなものを持っていた。その発表を新しき村で見ることが出来、それが当選していたら、自分の文筆で生きて行く門出の喜びであり、それを見ることが、自分の力を他に示す一つの誇りになることと心の内で決めていた（一九七一・七・二四）

引用が長くなったが、これらの箇所には、若き日の悦田にとって「新しき村」への訪問がどのような意味を持っていたかが、鮮明に描かれている。また、彼の「新しき村」行が農閑期をぬすんでの実行であったこと、出立に先立って武者小路実篤との手紙のやり取りがあったこと、『新しき村』等に記載された「新しき村の精神」に憧れを抱いたことなど、悦田の「新しき村」行をめぐる経緯を解明するための手がかりも多くある。さらに、自由な文筆活動への憧れとそれを束縛する「家」との葛藤、そしてそこからの「脱出」といった悦田文学の主要モチーフが、「新しき村」とのかかわりの中で現れていることも興味深く思われる。

ただし、この箇所に描かれている内容が、実際の悦田

の文学的経歴を正確に反映しているかという点については留保が必要である。例えば、引用の箇所では、元吉は投稿作品である「木賃宿の朝」と「小夜子さんの失敗と私の悲しみ」が当選するかどうかの発表を「新しき村」で確認しようとしている。しかし、「木賃宿の朝」が『文章世界』に掲載されたのは一九一九年五月であり、「私の懺悔と憐れな文子さん」が『婦人公論』に掲載されたのは一九二一年一〇月である。また、彼が初めて「新しき村」を訪れるのは一九二〇年二月である。「百姓は死んだ」では「新しき村」への脱出は失敗に終わっているので、ここでの「新しき村」への脱出願望を「新しき村」の初訪問の日付と照合することは適切ではないが、[3]「木賃宿の朝」と「小夜子さんの失敗と私の悲しみ」(「私の懺悔と憐れな文子さん」)の両作品の当選発表を「新しき村」で確認したいというのは、実際の年譜に照らしてみるといささか無理がある。

そのような事実との不整合を踏まえるならば、「百姓は死んだ」に描かれた「新しき村」への憧憬は、後年の[4]悦田が自身の文学的経歴を振り返りながら、投書家時代の次の文学的展開として「新しき村」行を位置づけていたことの表現と理解しておいた方が良いであろう。[5]

いずれにせよ悦田喜和雄の文学的事跡において「新しき村」との関係が重要な意味を持っていることは疑いない。「悦田喜和雄略年譜」(『四国文学』「悦田喜和雄先生古稀祝寿記念特集」、一九六五・八)には「大正八年(一九一九)／武者小路実篤氏に乞いて『新しき村』会員となり、何度か九州日向の『新しき村』に赴いて農耕に従事しながら小説を書く。」と書かれている。また、「悦田喜和雄作品目録」(後藤公丸『忘れられた農民作家　評伝悦田喜和雄』二〇〇一・一二、四国文学会。以下『評伝』と略称する)によれば、一九七六年一月に「黄昏の旅出」が『新しき村』に発表されている。悦田は、文学活動の初期から晩期に至るまでの長期間にわたって「新しき村」とのかかわりを持っていたのである。

こうした事実が知られていたにもかかわらず、例えば、悦田が「新しき村」にいつ頃どのくらい滞在していたのかなど、悦田と「新しき村」との具体的な関係についてはこれまで十分に明らかにされてこなかった。悦田の評伝を書いた後藤公丸は、悦田の小説作品や、「新しき村」関係者の回想記事を見わたした上で、「喜和雄はほぼ七年間、年一、二回ぐらい日向の「村」へでかけ、一月ぐらい滞在したらしいことが分かる。」(『評伝』前掲)と推定している。また、佃実夫「悦田喜和雄論ノートⅠ―その人と作品―」(『四国文学』一九六五・八)には、「新しき村」での悦田と志賀直哉の交流に関する貴重なエピソードが紹介されているものの、「新しき村」における悦

田の活動に関してはほとんど記されていない。

そこで、本稿では、悦田喜和雄の「新しき村」での活動の実情について、「新しき村」が発行していた『ニウス』や『新しき村通信』などの資料によりながら明らかにしていきたい。[6] そのことによって、徳島南部の農家で成長した一人の青年が、投書活動によって文学に目ざめ、その次のステップとして「新しき村」へと赴いたことの意味について考えてみたいと思う。[7]

一　「新しき村」への訪問

この章では、悦田喜和雄が「新しき村」を訪問した時期と、そこでの滞在期間について明らかにしていく。

まず、悦田がはじめて「新しき村」を訪れた時期を確定したい。悦田の最初の訪村について、永見七郎「やわらかい手―悦田喜和雄と新しき村」(『新しき村』一九八四・二)は次のように記している。

> 悦田喜和雄の名が新しき村六十五年の歴史の中に、はじめて出て来るのは、日向に村が生まれて三年目の大正九年である。(中略)その年の暮れに出た、新しき村「ニウス」によると、「現在、村に住んでいる者とその家族」の中には、もう悦田喜和雄の名はない。一年もたたないうちに、彼は村を出たのだ。

永見の記事には月日の記載がないため、後年、この記事を参照した後藤公丸は「季節は分からないが春らしい」(『評伝』前掲)と推測している。

さて、『ニウス』第九号(一九二〇・三)には、「○悦田喜和雄氏　新たに入村。(十八日)」とする記事がある。この記事により、悦田がはじめて「新しき村」を訪れたのが一九二〇年二月一八日であったと確定できる。

次に、この時の滞在期間について考えてみる。悦田喜和雄が「新しき村」に滞在していた期間に、志賀直哉がそこを訪れている。そして、志賀が離村する際に、悦田は志賀に同道して帰路についている。佃実夫「悦田喜和雄論ノートⅠ」(前掲)には、この時のエピソードが記されている。

> その「村」を訪れ、何日か滞在した志賀直哉と面識ができた。「村」(ママ)から志賀直哉が帰るとき、悦田喜和雄は随行した。この機縁は、志賀直哉の手によって、悦田喜和雄の処女作が、雑誌『白樺』に載せられる機縁ともなる。
>
> 「何等の切符を買うのですか……」
>
> と尋ねる悦田喜和雄に、
>
> 「君の乗るのでいいよ」と志賀直哉が答えた。それ

で悦田喜和雄は、三等の赤切符を買ったそうである。

「志賀さんが、三等の汽車に乗ったのは初めてでないだろうか？　駅に着いたらね、志賀さんに用のある新聞記者がホームに待っていて、二等車あたりで、うろうろ探し廻っているんだ。悪いことをしてしまったな、と思って弱ってしもうた」

直哉と悦田喜和雄は、後年になって私に語った。

志賀直哉が「新しき村」を離れたのが四月五日頃のことと推測される[8]ので、悦田の離村もこの頃のことと見ることができる。『ニウス』第一五号（一九二〇・五）に掲載された「村にすんでゐる人」の中にはすでに悦田の名は見えない。

次に、悦田が二度目に「新しき村」を訪れた時期と滞在期間を明らかにする。『ニウス』第三三号（一九二一・三）には悦田の二度目の訪問に関する以下の記事がある。

（二月―引用者）二十二日悦田兄二度目の来村。同兄は頗る農事に精通しておられるので其の教示によつて甚だ得るところが多い。同兄は四月初旬迄逗留の筈である。

さらに、この時の離村の時期については、『ニウス』第三五号（一九二一・五）に「悦田兄は四十日間滞留して四月四日帰国の途についた。遠くから態々来ていただいて仕事のことをいろ〳〵教えて貰へたことを同兄に深く感謝する。」とあり、四月四日に離村したことが分かる。悦田の二度目の訪村は、前年とほぼ同時期であり、滞在期間もほぼ同じであった。

一九二二年と一九二三年については、『ニウス』の残存状況が良くなく、悦田の動静を知ることができない。今後の調査に委ねたい。

一九二四年についても『ニウス』の残存状況は良くないが、同年の『ニウス』七月号が残っており、そこに「田植が終ると間もなく悦田君が、八月迄の予定で家に行き」との記事が見られる。さらにこのときの滞在について考える資料として武者小路実篤「新しき村より」（『人間生活』一九二四・六）の記述がある。

二月十四日に村を出て、四月六日に村に帰る。留守の人多くつて、久しぶりに逢へると思つた人に逢へないのは淋しくもあるが、村に居る兄弟姉妹の元気なのを久しぶりに見るのはうれしい。福永が帰つて居、悦田君が来て居たのはうれしい。

この記述から、四月六日には悦田は「新しき村」に滞

在していたことが分かる。また、悦田喜和雄「労働」（『人間生活』一九二四・八）の脱稿日が「六月二十一日朝」となっているので、この時はまだ「新しき村」にいたようである。『ニウス』の記事どおり、悦田が八月以降「新しき村」を訪れたかどうかについては確認できていない。

続いて一九二五年の悦田の訪村について考えていきたい。武者小路実篤「新しき村の現状」（『新しき村通信』第三号、一九二五・一。脱稿日は「一二、二七」）には、「労働。悦田。杉山」とあり、前年の一九二四年一二月二七日には悦田が「新しき村」に滞在していたことが分かる。そして、離村の時期については、飯田祥彦「編集雑記」（『新しき村通信』第七号、一九二五・三。脱稿日は「三月十二日夜」）に「悦田君が此の間病気してから、一向はつきりしないので、暫く国の方で静養するために、明日帰るさうです。田植までには村に帰つて来ると言つて居ます。」とあるので、三月一三日と見ることができる。

飯田祥彦の記事には、悦田が「田植までには村に帰つて来る」と言っていたことが記されているが、悦田は「新しき村」に戻ってきたのであろうか。武者小路実篤「東京にて」（『新しき村通信』第一三号、一九二五・七。脱稿日は「六、二三」）には、「悦田君、上田君、トシ倉君はもう村にゐることと思ふ。」と書かれており、訪村に関して悦田から武者小路宛に連絡があったことをうかがわせる。武者小路実篤「新しき村より」（『新しき村通信』第一四号、一九二五・八。脱稿日は「八、四」）には、「畑の方も悦田君が来、上田君が来今迄の人の上に力が加はつたので、気持ちよく行つてゐる。」とあり、八月には悦田が「新しき村」に滞在していたことが分かる。この時の滞在からの離村の時期については、雲影龍音「左様なら」（『新しき村通信』第一七号、一九二五・一一。脱稿日は「十一月六日」）に、「昨日悦田兄が郷里へ行かれましたが、（勿論又村へ帰られると思ひますが）悦田兄のやうな熱心な、そして農事に委しい人は是非四五人位ゐて欲しいと思ひます。〔〕村のために熱心に働く人、農事に委しい人、さういふ人々は尊敬していゝと思ひます。単に尊敬するのみに止めず、何かの方法で優遇してはどうかと思ひます。」とあることから、一一月五日であることが分かる。こうして見ると、一九二五年の悦田の「新しき村」での滞在期間は、前年から三月一三日までと、六月後半から十一月五日までの約八ヶ月間であると推測できる。ただし、ここで推測された滞在期間の間に一度も村を離れていなかったと断定することはできないため、さらなる調査が必要である。

次に一九二六年の滞在時期について考えていく。山手

良之「病気して」(『新しき村通信』第二一号、一九二六・三)には、「畑の方はこれから愈々春蒔だが、今の人数に悦田君が帰つて来れば(二三日前近い中に国を発つといふ通知を貰つた)今迄になく人数も増えるし、粒も揃ふわけだから、今年度は隔段の進み方をする事と思ふ。」とあり、悦田が三月頃に出立の予定を立てていたことが分かる。また同年五月発行の『新しき村通信』第二三号には「旅行中の人(中略)悦田喜和雄　徳島県由岐局区内木岐」とあるので、五月には滞在していたことが分かる。この時の離村の時期については、それの分かる資料を見ることができていない。ただし、上田慶之助「農場より」(『新しき村通信』第二五号、一九二六・七)には、「春夏のものでは馬鈴薯、南瓜等の少し早作りを悦田君がいゝと言つてゐました。(中略)悦田君がわざ〳〵田植を手伝ひかたがた来てくれました。」とあるので、七月にはまだ在村していたようである。また、古川芳三「農事のこと」(『新しき村通信』第二八号、一九二六・一〇)には、「稲は田植に悦田君がわざ〳〵来て、雨の最中に皆して滞りなく植付けたのでしたが、」と回顧されており、稲刈りに参加している様子がないので、十月には村にいなかったようである。七月から十月の間のどこかで悦田は離村したと見られる。

一九二六年一二月、悦田喜和雄の父慶一が亡くなる。これにより、悦田は家業の農業を継ぎ、そちらに専念することを余儀なくされる。この頃に「新しき村」へおくった悦田の手紙が杉山正雄「悦田君の手紙」(『新しき村通信』第三二号、一九二七・二)に紹介されている。

(前略)〔本文のママ〕

村をうまくやつて下さることを何よりお願しておきます。私もこちらにゐて何かの方法で村のために働くことが出来たら働きたく思ひます。農具も何か送りたいと思ひます。何かほしいものかあつたら御相談下さつたら探したいと思ひます〔。〕と云つても高い物は買ふことは出来ないと思ひますが、それでも御相談下さつたら都合のつき次第何とかいたしますから。それも私の方で少しも無理はしませんから気楽に相談して下さつたら出来ないものは出来ないと云ふし出来るときは何なりすぐやりますから。

それから農業の方、植付時などこちらのことをお知らせしたいと考へたりします。やはり百姓には植付時とか蒔付時が何よりも必要ですから。それをうまくはずさないやうにやれば割合らくに上等のものが作れます。

やはり村へは時々行つて見たくてたまらなくなります。来年位、春か冬に行くことが出来るかと思ひ

ますが。

その内私の方も家も少しづゝでもよくして村の人で旅行する人があつたら来てもらへるやうにしたいと思ひます。今は、あばらや、と云ふ感じできたなくて仕方ありませんが、だん〳〵よくして行くつもりです。夏は魚つりとか冬には狩にいつて遊ぶやうにする、村の人にそんな人があつたら来てもらうことが出来るやうに来てもらつてもこちらに恥かしさを感じないやうに、ある処まで来てもらつた人に不足を感じさせないやうにしてから来てもらうようにしたいと思つてゐます〔。〕この頃こちらでは魚は沢山とれます。ブリなど前日三百五十位一度にとれました〔。〕見に行つても何んだか心がへんになります。そのブリが生きてゐるのです。

ここでは父の死についての言及はないが、悦田が父の死によって家業に専念せざるえず、毎年のように行っていた「新しき村」への訪問を断念しなければならなかった事情はうかがい知ることができよう。加藤勘助「村より」(『新しき村通信』第三六号、一九二七・六)にも、「村もこれから植付などで、急がしい。毎年の様に、植付に四国の果から、わざわざ加勢に来てくれてゐた、悦田君のことを思ふ。悦田君が、お父さんが亡くなられて、村にも来られない。」とあって、父の死と「新しき村」訪問の断念との関係が裏付けられる。

先に引用した手紙には、家を良くしていきたいという希望に満ちた思いが綴られていたが、それはまた家を守らなければならない責務の裏返しの表現であるのかもしれない。「来年位、春か冬に行くことが出来るかと思ひます」という期待がかなえられることはなく、これ以降、悦田が日向の「新しき村」を訪れることはなかった。

本章で推定してきた悦田喜和雄の「新しき村」滞在期間をあらためてまとめてみると、以下の通りとなる。

・一九二〇年二月一八日来村〜四月上旬(五日頃)離村
・一九二一年二月二二日来村〜四月四日離村
・一九二四年四月四日までに来村〜六月二一日以降に離村
・一九二四年一二月二七日までに来村〜一九二五年三月一三日離村
・一九二五年六月二三日頃来村〜一一月五日離村
・一九二六年三月に来村予定〜七月以降離村

全体として曖昧な点も多く、一九二二年や一九二三年など推測も難しいところもある。今後のさらなる調査に

委ねるとともに、大方のご教示をお願いしたい。

悦田の「新しき村」訪問は一九二六年の訪問をもって最後となるが、その後も悦田は寄附によって「新しき村」を支援したり、手紙のやり取りを通じて「新しき村」の人々との交流を続けていく。悦田と「新しき村」との関係の全体像を見ようとするならば、これ以後の関係も含めて捉えなければならないが、本稿では悦田の「新しき村」訪村に関する調査報告にとどめたい。以下では「新しき村」において悦田がどのような活動をしていたのか、その様子について見ていきたい。

二　「新しき村」での活動（一）―農作業について

本章では「新しき村」での悦田喜和雄の活動について見ていく。後藤公丸は悦田喜和雄にとっての「新しき村」の意味について、志賀直哉との知遇をえたことの意義を認めつつも、「それ（志賀直哉が悦田の作品を『白樺』に推薦したこと―引用者）以後の四年間の訪村は「作家への道」としてではなくて純粋に「援農」であった、という考え方もできるだろう」（『評伝』前掲）と述べ、「援農」としての側面を強調している。

たしかに、「新しき村」における悦田の姿が思い起こされるとき、その農業者としての側面が前面に出るようである。「新しき村」で悦田と親交のあった上田慶之助は次のように述べている。

> 四国は阿波の農家で、そのあととりが又しても家をとび出して村にやって来る。そうして、どれほどかするとまた引き戻されるように郷里に帰らねばならず、お家にとっても長くは欠くことの出来ぬ人と思はれた。が、村では悦田君の来てくれたありがたさは比類がなく、武者小路先生の格別の信頼をはじめとして誰も彼も、僕なども何か豊かな大船に乗った感じで実に春風に吹かれ乍ら、独り言のような大らかな叱言や冗談を浴び乍ら、畝を耕し天秤で桶を担いだものだった。本当は悦田君のいてくれる間は僕など天秤を肩にすることは自然尠なかったのだろうと思はれる。君がやれば実に何事も日常茶飯事の如く楽々と余裕をもって運ばれる。こっちがやるとなるとヘタをすると悲壮感。明らかに素人と玄人の違ひがあり、大らかな君の人柄があった。（「日向の村など」『四国文学』一九六五・八）

また韮山圭介は「新しき村」で悦田とはじめて出会ったときの印象について、「会ってみると、悦田さんはま

るで文学青年とか小説家というムードのない、見るから
に朴訥なまる出しのお百姓さんだった」(「三つ児の魂―
悦田さんのこと―」『四国文学』一九六五・八)と述べて
いる。

大津山国夫『武者小路実篤　新しき村の生誕』(前掲)
が、「武者小路は大正十四年十二月に新しき村を去って
村外会員になった。五〇余人を自活のめどさえたたない
日向に残したのだから、彼の前半生における最大の挫折
であり、失意であった。」と指摘するように、武者小路
実篤の構想した「新しき村」の計画は、その理想の高さ
に比して、現実的な見通しは明らかに甘かった。

ほとんど農業の素人で組織された「新しき村」にとっ
て、農家で育った悦田喜和雄の訪問はありがたいものの
であった。悦田の二度目の訪村を伝える記事においても
「同兄は頗る農事に精通しておられるので其の教示によ
って甚だ得るところが多い。」(『ニウス』第三三号、前
掲)と述べられており、農業の玄人として遇されている。
武者小路実篤も悦田喜和雄に大きな期待をかけていた。

悦田君が又自家の暇をぬすんで来てくれたことは
実によろこびである。新しく来た人達もよろこんで
ゐてくれるのに感謝した。悦田君の話だと今の調子
でゆけば、三年たてば立派な畑になるさうで、悦田
君も皆の熱心なのによろこんでくれた。(「六号雑
記」『新しき村』一九二一・四)

悦田君も帰つてくれゝば鬼に金棒だ。新しく入つ
た人の内に実にいゝ人がゐてくれるのもよろこびだ。
古くからの人は実におちついてゐる。村も段々根が
はへた。今に目鼻が出事る。いゝ人の力は実にたの
もしい。(「六号」『新しき村』一九二一・二)

それから農業経済の方も之からもつとよく考へて
やりたく思ふ。この方面にはいゝ人が出来た。
悦田君が来てくれると、その方のよき相談相手に
なると思ふ。
自分にはその方はまるで見当がつかない。(「新し
き村の今後」『新しき村』一九二三・一)

自らが農業に疎く、農業経済の面で自立することがで
きない「新しき村」に頭を悩ませていた武者小路にとっ
て、悦田は頼りになる存在であった。[9] このように農業の
側面における悦田の貢献については、「新しき村」の村
内会員もしばしば述べるところである。

昨日悦田兄が郷里へ行かれましたが、(勿論又村へ

帰られると思ひますが)悦田兄のやうな熱心な、そして農事に委しい人は是非四五人位ゐて欲しいと思ひます〔。〕村のために熱心に働く人、農事に委しい人、さういふ人々は尊敬していゝと思ひます。単に尊敬するのみに止めず、何かの方法で優遇してはどうかと思ひます。(雲影龍音「左様なら」前掲)

村の田植は、二三日前に終つた。六七人、大い時は十人余りの兄弟が、十日かゝつた由。悦田君が四国の遠方から、わざわざ田植に来てくれ、あつらへ向きの雨がふりよい田植が出来たと思ふ。(加藤勘助「近況」『新しき村通信』一九二六・七)

悦田自身も「新しき村」での農作業を楽しんでいたようである。川島傳吉『日向の村の思ひ出』(一九五九・七、知性社)には「悦田喜和雄君の若いながらに落ちついた楽しげな働きぶりをみて、先生は感心されて、この若者は有望だと思はれたやうでした。」と記されている。悦田の「大らかな叱言や冗談」については先ほど上田慶之助「日向の村など」(前掲)で見たが、鈴木安太郎の「悦田君のうるさい注意には一寸閉口。其の度に皆笑ふ。」(「田植日記」『人間生活』一九二四・八)という記述からも、「新しき村」における悦田を介した農作業の雰囲気が伝わってくる。

悦田は直接農作業を助ける以外にも、寄附や寄贈品を通じて「新しき村」への支援を行っている。「新しき村」関連の寄附や寄贈品の報告記事から悦田のものを拾ってみる。

・「蜜柑一箱」『新しき村』一九二一・一
・「種子其他」『新しき村』一九二一・六
・「モグラトリ、鍬四挺、鎌四挺」『新しき村』一九二一・七
・「種子」『新しき村』一九二一・一〇
・「一口」(五〇銭)『新しき村』一九二二・一〇
・「乾魚、若干」『新しき村』一九二三・一〇
・「乾魚、一包」『人間生活』一九二四・六
・「百円」『新しき村通信』一九二五・一
・「丹波栗接穂」『新しき村通信』一九二八・五
・「一口」(「水路寄附金」)『新しき村通信』一九二八・六
・「(十五円)『祭用餅代として』」『新しき村通信』一九二八・一一
・「三円」『新しき村通信』一九三一・一
・「(二円)田植費用の為めに」『新しき村通信』一九三三・七

・「(三円五十銭)稲作肥料の為めに」『新しき村通信』一九三三・八

悦田は、一九二六年一二月に父を亡くしたことによって「新しき村」を訪問することができなくなるが、それ以後も寄附や寄贈品を通して「新しき村」との交流を続けていたのである。

農作業の面について言えば、悦田は「新しき村」の期待によく応えていたし、悦田の側もそうした信頼を得て居心地よい思いであったろう。それでは、文学活動の面ではどうであったのか。次章ではこの点について考えていきたい。

三　「新しき村」での活動(二)―文学活動について

悦田は、「新しき村」において農業の専門家としての尊敬を受け、自らも楽しく農作業に励んでいた。しかし、彼が「新しき村」へ行くことを決意した動機は、単に農作業を行うためではなかったはずである。本稿の冒頭で示した「百姓は死んだ」(前掲)には、元吉の「新しき村」行への思いとして、「そこへ行きさえすれば好きな文章が自由に書ける」や「そこで雑草のように伸び伸びと自我を完全に成長させる」といったことが記されていた。おそらく悦田の訪問にもまた、「新しき村」の精神への憧れや文筆活動への期待がこめられていたと思われる。

それではそうした期待は叶えられたのであろうか。後藤公丸『評伝』(前掲)はその点について次のように述べる。

> 作家修業が目的の喜和雄にとっては、新しき村における師実篤との交流が、これまで見て来たように創作の実技指導はしないという、いってみれば君子の交わり……水のごとく淡きをよしとする「君子の交わり」であり、他には「文学友達」も居なかったとすれば、折角の「家出」は何だったのか？

『評伝』は「勿論「新しき村」への道は、作家志望の喜和雄にとっては、中央文壇への道をひらいた登竜門であって、これは決定的な意味を持っている。」と付けくわえることも忘れていないが、総じて文学活動の面における「新しき村」の役割については低く見積もられている。「創作の実技指導はしない」という実篤の姿勢については、悦田に師事した佃実夫からの直話として次のようなエピソードが紹介されている。

短編小説を書いて先生のところへもって行き、言われるままに部屋の違い棚において帰る。けれども、幾日たっても手を触れられた様子がない。そのうちに、自作の欠点に気づき、返してもらって手を入れてまた戻しておく。そんなことを繰り返すうちに、もういいだろう、という感じで東京へ送ってくれた（『評伝』前掲）

こうしたエピソードからは武者小路実篤の指導姿勢をうかがうことができて興味深い。ただ、悦田の文学活動にとって「新しき村」がどのような役割をはたしたのかという点については、もう少し様々な観点から検討してみる必要があろう。

まず、よく知られていることであるが、悦田の中央文壇進出の足がかりとして、武者小路実篤や志賀直哉の後押しがあった。例えば、悦田の「雑炊」が『白樺』（一九二二・六）に掲載された経緯には、武者小路実篤や志賀直哉の関与があった。

先日悦田君から原稿がいつたことゝ思ふ　雑炊の方は他に金のとれる処に出せなかつたら白樺に出してもいゝと思つてゐる。君に何か気がついた処を教へてもらうといゝやうにすゝめておいたが病中だから気になるが、（一九二二・四・一五消印。引用は『武者小路実篤全集　第十八巻』一九九一・四、小学館）

武者小路は「雑炊」の原稿を志賀に送り、雑誌社への周旋を依頼している。武者小路の依頼を受けた志賀は、まず「金のとれる」雑誌である『新潮』の水守亀之助のもとへ「雑炊」の原稿を送り、掲載の依頼をする。しかし、この依頼が断られてしまったため、志賀は「雑炊」を『白樺』にまわしたのである。

悦田君の小説今日水守君からの返事で先約が溜つてゐて何時という的てがないからと断はつて来た、それで白樺の方へ廻はしたが、悦田君も折角あてにしてゐてくれてお気の毒に思ふ、（武者小路実篤宛、一九二二・五・一四消印。引用は『志賀直哉全集　第十七巻』注(8)前掲）

また、「御不沙汰してゐる、悦田君の原稿を送つた読んで見て、賛成だつたら青年へのせてくれ玉へ、」（木下検二宛、一九二三・一〇・二七消印。引用は『志賀直哉全集　第十八巻』二〇〇〇・八、岩波書店）という志賀のはがきも残されており、悦田の「庄吉爺さん」（『青

年』一九二四・一）の掲載についても志賀の働きかけがあったことが分かる。「新しき村」を訪問し、武者小路実篤や志賀直哉との面識を得たことが、悦田の文学活動に大きな役割を果たしたことは確かである。[10]

次に「新しき村」での文学活動の様子を見ていきたい。悦田が「新しき村」で熱心に文学活動に励んでいた様子は、「新しき村」で交流のあった人たちの回想記事でも触れられている。上田慶之助「日向の村など」（前掲）は次のように述べている。

> 原稿を書くか、絵を描くか、そういふ人間が多かった。文学に遠かった僕には自然そういふグループの話題にも疎く、悦田君のこの方面の村の生活に於ける記憶にも乏しい方だが、よく、同好の士と文学の話をしていたようだった。

川島傳吉の回想にも次のようにある。

> 悦田喜和雄君は二十歳位でしたが、農業の身についた悠々として落ちついた人で、この人こそ村の働き手の模範にできそうだと先生から思はれた人のやうでした。野菜など、うまく育てました。久保源一君などと共に、「ハナフキ文学」といふ廻覧雑誌をつくって小説を書いてをりました。後に中央公論から云はれて小説を出したほどになりましたが、滝田樗陰が死んでからは農家の親父さんになつたことでもあり、あまり書かなくなつたやうでした。農村に生活して農業者の生活にうちこんだ人の書いた文学として、異例なものでしたのを惜しく私は思つてをります。（『日向の村の思ひ出』前掲）

『新しき村五十年』に久保源一の名が見えるのは一九二一年であり、同年に久保は『新しき村』へ作品を発表してもいるので、悦田と「ハナフキ文学」という廻覧雑誌をつくったのは一九二一年と見られる。一九二一年は悦田の二度目の訪村の時期であり、まだ中央文壇への足がかりも得ていない。そうした時期から、悦田は「新しき村」で意欲的な文学活動を行っていたのである。

また悦田が中央文壇雑誌に作品を発表するようになってからも、彼は「新しき村」の文学活動に積極的に参加している。

> 若い連中で雑誌を出したがつてゐます。百円許りで印刷器械の簡単なのが買へると云ふので、それで手ずりにして、毎月出そうなぞと云つてゐます。（中略）杉山、松本、福永がおもになつてやるはづです。

加藤君、悦田君なぞも加はりますが。方々の支部で雑誌を出してゐる人達とは合同して、立派な生々した文芸雑誌を出したいと云つてゐます。（武者小路実篤「新しき村より」『人間生活』一九二四・九）

この計画は翌一九二五年九月に『黎明の鳥』の発刊となって実現される。悦田は『黎明の鳥』に「財布」（一九二五・九）、「人生（戯曲）」（一九二五・一一）、「つかれ」（一九二六・三）などを発表している。こうした「新しき村」の人々との文学的交流が、悦田の文学に対する意欲をかきたてたと見られる。

このように、悦田の文学活動における「新しき村」の役割を考えるとき、悦田が「新しき村」関連の同人誌に作品を多く発表していることを見落とすことはできない。同時に、彼が白樺派系の雑誌にも作品をいくつか発表していることも注意すべきである。これまでこのあたりの調査が十分に進んでいなかったため、悦田文学における「新しき村」の役割も不透明なところがあった。そこで、一九二〇年から一九三〇年までの間で、悦田が「新しき村」関連の雑誌、白樺派系の雑誌に発表した文学作品（小説、戯曲、小品）を以下に掲出してみたい。『評伝』（前掲）の「悦田喜和雄作品目録」に未掲載の作品については末尾に「＊」を付けた。

・「叔母」『生長する星の群れ』一九二一・五＊
・「雑炊」『白樺』一九二二・六
・「境遇のあざけり」『白樺』一九二三・八
・「村の生活にて」『人間生活』一九二四・六＊
・「財布」『黎明の鳥』一九二五・九
・「お梅」『不二』一九二五・九
・「人生（戯曲）」『黎明の鳥』一九二五・一一
・「土佐坊」『不二』一九二六・三＊
・「乳ばなれ」『「ひ」新しき村』一九二六・一〇
・「へいげえ（妖怪）」『大調和』一九二七・五＊
・「神を呼ぶ（一幕）」『大調和』一九二八・四＊
・「白鳥の歌」『大調和』一九二八・五＊
・「若い衆」『第三の者』一九二九・一＊

悦田が久保源一と作ったという廻覧雑誌『ハナフキ文学』など未見のものもあり、今後もこうした雑誌に発表された悦田作品が掘り起こされる可能性は大きい。

悦田文学の本格的な出発を記述する際に、『白樺』に発表された「雑炊」から始められることが多いが、この一覧を見ると『生長する星の群れ』に掲載された「叔母」という作品も注意される。この作品は一九二四年八月に『改造』に発表された「叔母」のもとになった作品

である。悦田の中央文壇での活躍の土台に「新しき村」での活動があったことは確認されて良いであろう。

また、悦田の文学活動を考える際に、『不二』『大調和』『「ひ」新しき村』『第三の者』に発表された作品について確認しておくことも重要である。従来、一九二五年一〇月に悦田の庇護者であった滝田樗陰が亡くなったことで、悦田の文学活動が低調になったと説明されてきた。たしかに滝田の死によって文壇誌への作品発表の機会は減ったが、悦田は「新しき村」や白樺派関連の雑誌には持続的に作品を発表していたのである。おそらく、悦田の文学活動の継続を難しくした要因は、父の死にともなって家業を引き継がなければならなくなったこと、そして、そのことによって「新しき村」への訪問ができなくなったことにある。「新しき村」に滞在することができなくなったことによって、作品執筆の時間が制限されざるをえなくなる。また、文学仲間に取り囲まれるという刺激的な環境が失われてしまったことで、文学へのモチベーションが減退してしまったことも考えられる。ただし、一九三〇年以降も、悦田は「新しき村」関連の雑誌へ断続的に作品を発表しており、「新しき村」とのつながりが悦田の文学活動を励ましていたと言えよう。

「新しき村」への滞在が悦田の文学活動に与えた意味を考えるために、悦田が「新しき村」に滞在していた時期と作品が書かれた時期を重ねてみることが良い目安となるかもしれない。悦田の作品には作品末尾に作品を書き上げた時期、あるいは清書が終わった時期が書き込まれることがある。本稿では、この記載を「脱稿日」と称し、それが判明する作品については脱稿日をまとめた。このことで、作品がどこで書かれていたのかを知るための目安を得ることができる。本稿の末尾に「新しき村」への滞在期間と脱稿日とを照らし合わせることができるように「悦田喜和雄関連事項年表」を付した。この表を見ると、まず、投書家時代の悦田が、「新しき村」の来訪以降、小品に加えて小説を盛んに投稿するようになっていることが分かる。もちろん、投稿はしたものの選評にも漏れた作品がある可能性は十分にあるので、そのことは考慮しなければならないが、一つの傾向として指摘しておきたい。「新しき村」の訪問が、悦田の小説執筆の意欲をかき立てた可能性は高い。

また、この表からは、文壇誌か同人誌かを問わず、悦田がもっとも活発に文学活動を行っていた時期が、ちょうど「新しき村」に滞在していた時期と重なることが分かる。特に、一九二四年、一九二五年あたりは、雑誌の発行日だけを見ると「新しき村」への滞在と重ならないところも多いが、脱稿日と照らし合わせてみると、「新しき村」滞在と脱稿日との重なりが顕著に見られるので

ある。「新しき村」では、義務労働の時間が一定程度決められていて、それ以外は自由時間となっている。こうした時間的な余裕と、文学仲間に囲まれた環境とが、悦田の活発な文学活動を支えていた。そうした点においても、「新しき村」は悦田の文学活動にとって大きな意味を持っていたのである。

おわりに

本稿では、『ニウス』や『新しき村通信』などの「新しき村」関連の雑誌記事によりながら、悦田喜和雄の「新しき村」の滞在時期を推定してきた。また、それらの記事の内容から、「新しき村」での悦田の活動について、農作業と文学活動の面から整理してみた。特に、文学活動の面においては、悦田にとっての「新しき村」の意味が決して小さいものではなかったことを明らかにした。武者小路実篤や志賀直哉との面識を得て中央文壇進出への足がかりとなったこと、「新しき村」で文学仲間たちとの交流があったこと、「新しき村」や白樺派系の雑誌へ活発に作品を発表したことなどについて確認してきた。

徳島県で物を書くことに関心を持ち始めた青年が、作品投稿からさらなる展開を期して足を向けたのが「新しき村」であった。そこでの活動が、悦田に文学活動についての大きなチャンスを与えることになる。それと同時に、そこには一人の青年が満足に文学活動に携わるための時間的余裕と、同好の士に囲まれた絶好の環境があった。

後年、悦田は「新しき村」に在村していた武者小路房子に宛てて手紙を送っている。

> 悦田君から、年に数へるほど、やはりこんな風の便りがございまして、朝書きたいと思つてゐると、日が出て、夜る書きたいと思ふと、眠つてしまふと申し、今の内田を鋤いておくと、いもちのふせぎとなる田の草は五六回とるやうになどゝ申してまいります(武者小路房子「おたより」『新しき村通信』第一六六号、一九三九・五)

この手紙から、家業を継いだ悦田が、仕事におわれて満足に文学に取り組むことができない様子を読み取ることができる。文学を書けるかどうかの線引きが、時間的な余裕の度合いと正確に見合ってしまうのならば、それはいささか淋しい話である。

【注】

(1) 悦田喜和雄については、「悦田喜和雄略年譜」(『四国

文学』一九六五・八)、佃実夫「悦田喜和雄論ノートⅠ―その人と作品―」(『四国文学』一九六五・八)、後藤公丸『忘れられた農民作家　評伝悦田喜和雄』(二〇〇一・一二、四国文学会)、由岐町史編纂委員会編『由岐町史・上巻〈地域編〉』(一九八五・九、由岐町教育委員会)、同『由岐町史・下巻〈図説・通史編〉』(一九九四・三、由岐町教育委員会)を参照した。

(2)「新しき村」については永見七郎編『新しき村五十年』(一九六八・一一、新しき村)、大津山国夫『武者小路実篤論―「新しき村」まで』(一九七四・一、東京大学出版会)、同『武者小路実篤研究―実篤と新しき村』(一九九七・一〇、明治書院)、同『武者小路実篤、新しき村生誕』(二〇〇八・一一、武蔵野書房)を参照した。

(3)　ちなみに「百姓は死んだ」では「新しき村」への家出は失敗に終わっている。悦田には実家からの脱出をモチーフとする作品がいくつかあるが、どれも失敗に終わるという設定を取っている。

(4)　悦田喜和雄の投書家時代については、富塚昌輝「資料紹介　悦田喜和雄の投書家時代―『文章世界』『婦人公論』に掲載された投書作品の紹介」(『中央大学国文』二〇二〇・三)を参照されたい。また、悦田が父の死によって家業に専念せざるをえなくなったことについては、富塚昌輝「悦田喜和雄の童話作品―「松太と鉄砲」の紹介」(『平成31年度総合科学部創生研究プロジェクト経費地域創生総合科学推進経費報告書』二〇二〇・三)を参照されたい。

(5)　こうした悦田の整理は大きな流れとしては誤っていないが、本稿に付載した「悦田喜和雄関連事項年表」に見られるように、投書家時代と「新しき村」訪問には、時期的に重なっているところがある。ただし、悦田喜和雄「農村小景」(『文章倶楽部』一九二八・二)においても、悦田は自身の略歴を「始め、新潮社の文章学院の講義録を読み、だん〳〵投書をやり、新しき村に走り、武者小路先生に色々お世話になった。父に死なれ、今は家で百姓をしてゐる。」とまとめている。

(6)　次の段階として、「新しき村」での活動や交流が悦田の作品にどのような影響を及ぼしたのかという点が明らかにされなければならないが、その点については別稿に委ねたい。

(7)　私は悦田喜和雄に関する一連の研究を通して、悦田喜和雄の作品が特別に優れているということを言いたいわけではないし、悦田喜和雄の名を文学史の中に銘記すべきであると主張したいわけでもない。そうではなく、一人の人間の人生において文学を書くことや読むことがどのように取り入れられていったのか、生活のなかに文学をめぐる活動がどのように位置づけられているのかについて明らかにすることを目指している。そして、そのことを通して文学を書く・読むことが私たちの人生・生活に何をもたらすのか、文学を書く・読むことが私たちの日常の振るまいをどのように形づくるのかといったこ

とについて探究していきたいと考えている。

(8) 志賀直哉の武者小路実篤宛はがき(一九二〇・四・八消印。引用は『志賀直哉全集　第十七巻』二〇〇〇・七、岩波書店)に「今度は色々ありがたう、村の人達からも大変いゝ感じを受けた、(中略)長崎一泊　博多一泊、昨日大雅堂と別府へ一寸よつて、晩から汽船へ乗つた」とある。

(9) 武者小路は、差出年不詳の悦田喜和雄宛書簡に「近い内に君の来て下さるのをうれしく思ひます。旅費のたしにいく分かなることをのぞんで為替を御送りします、わるくらないやうにお願ひします。／皆御まちしてゐます。」(『武者小路実篤全集　第十八巻』前掲)と書いており、武者小路が悦田の訪村の旅費を負担していることが分かる。こうした点にも武者小路の悦田に対する厚遇の様子がうかがわれる。

(10) 武者小路実篤が悦田の作品を雑誌社に紹介したかどうかについては、それを確かめることができる直接の資料を見ることができていないため分からない。ただ、『改造』(一九二四・八)に発表された「叔母」について、「今度の作は三十枚程のもので武者小路実篤氏の推薦するところださうだ」(『読売新聞』一九二四・七・一七)という評などがある。

※本研究にあたり神奈川近代文学館、徳島県立文学書道館、武者小路実篤記念館のお世話になりました。心より感謝申し上げます。
※本研究はJSPS科研費JP20K12918の助成を受けたものです。

(とみつか　まさき　本学准教授)

年	月	滞在期間	脱稿日	発行日	ジャンル	備考
	6	～(21)	8「田と畑」 13「脱出」 21「労働」	「村の生活にて」『人間生活』＊	小品	
	7		19「平吉の日記」	「村の畑、其の他」『人間生活』＊	随筆	
	8		27「百姓」	「労働」『人間生活』＊ 「田と畑」『人間生活』＊ 「叔母」『改造』	随筆 随筆 小説	
	9			「平吉の日記」『女性改造』	小説	
	10			「百姓」『中央公論』	小説	
	11		13「くだかれた心」			
	12	(27)～		「脱出」『新潮』	小説	
1925	1			「くだかれた心」『中央公論』	小説	
	2		12「敗れたる人々」	「皮肉な話」『文藝春秋』＊	小説	
	3	～13				
	4			「敗れたる人々」『中央公論』	小説	
	5					
	6	(23)～		「バクチ(博奕)」『中央公論』	小説	
	7		22「財布」			
	8		5「お梅」 26「人生(戯曲)」	「風追ふ家」『関西文芸』	小説	
	9			「財布」『黎明の鳥』 「お梅」『不二』	小説 小説	
	10		20「悲しき願ひ」			25 滝田樗陰死去
	11	～5	21「猫」	「人生(戯曲)」『黎明の鳥』	戯曲	
	12			「悲しき願ひ」『中央公論』 「鏡」『文藝春秋』	小説 小説	
1926	1		17「ギチと吉公」 18「つかれ」	「猫」『サンデー毎日』	小説	
	2					
	3	未詳～	10「土佐坊」	「ギチと吉公」『中央公論』 「赤い手帳」『不同調』 「つかれ」『黎明の鳥』	小説 小説	
	4			「土佐坊」『不二』＊	小説	
	5					
	6		29「宝篋印塔」			
	7	～未詳				
	8		27「乳ばなれ」	「宝篋印塔」『新小説』	小説	
	9					
	10			「財布(博奕)」『地方』 「乳ばなれ」『「ひ」新しき村』	小説 小説	
	11					
	12					父・悦田慶一死去
1927	1					
	2		9「へいげえ(妖怪)」			
	3					
	4			「此頃のこと」『徳島文芸』＊	随筆	
	5			「へいげえ(妖怪)」『大調和』＊	小説	
	6					
	7					
	8					
	9					
	10					
	11					
	12			「彼等」『農民』	小説	
1928	1					
	2			「農村小景」『文章倶楽部』＊	随筆	
	3					
	4			「神を呼ぶ(一幕)」『大調和』＊	戯曲	
	5			「白鳥の歌」『大調和』＊	小説	
	6					
	7					
	8					
	9					
	10			「しけ(暴風)」『大調和』＊	小説	
	11					
	12					
1929	1			「若い衆」『第三の者』＊	小説	
	2					
	3					
	4					
	5					
	6					
	7					
	8					
	9					
	10			「加藤勘助を哭す」『新しき村通信』＊	追悼文	
	11					
	12					

悦田喜和雄関連事項年表

・「滞在期間」においては悦田喜和雄が新しき村に滞在していた期間を塗りつぶしで示した。
・「滞在期間」においては滞在開始の日付を「数字～」と表し、滞在終了の日付を「～数字」と表した。
・「滞在期間」において滞在開始・終了時期が判明しない場合は滞在が確認される日付を括弧内に示した。
・「脱稿日」は作品末尾に記載されている日付に基づいて作成した。
・「発行日」は作品が発行された年月に基づいて作成した。
・「発行日」に記載した作品の内、後藤公丸『評伝』の「悦田喜和雄作品目録」に未記載の作品については「＊」を付した。
・「ジャンル」には「発行日」に記載した作品に対応するジャンルを記載した。

年	月	滞在期間	脱稿日	発行日	ジャンル	備考
1918	11			「暴風雨の夜」『文章世界』＊	散文	未掲載
	12					
1919	1					
	2					
	3					
	4					
	5			「木賃宿の朝」『文章世界』＊	小品	
	6			「貰ひ風呂」『文章世界』＊	小品	未掲載
	7			「肺らしき病」『文章世界』＊	小品	未掲載
	8					
	9			「戦慄」『文章世界』＊	小品	未掲載
	10			「川」『文章世界』＊	小品	未掲載
	11			「私の生活」『文章世界』＊	小品	
	12					
1920	1			「夕飯」『文章世界』＊	小品	
	2	18～				
	3			「私」『文章世界』＊ 「彼の場合」『文章世界』＊	小説 小品	未掲載 未掲載
	4	～5		「村の京やん」『文章世界』＊ 「父の病」『文章世界』＊	小説 小品	未掲載 未掲載
	5			「冷い風」『文章世界』	小説	未掲載
	6					
	7			「働く者の喜び」『文章世界』＊ 「私とドングリ」『文章世界』＊	小説 小品	未掲載
	8			「暗き家」『文章世界』＊	小説	未掲載
	9			「村の京ちやん」『文章世界』＊	小品	
	10					
	11			「恋人」『文章世界』＊	小説	未掲載
	12					
1921	1					
	2	22～				
	3		16「叔母」〔星の群れ〕			
	4	～4				
	5			「叔母」『生長する星の群れ』＊	小説	
	6					
	7					
	8					
	9					
	10			「私の懺悔と憐れな文子さん」『婦人公論』＊	小説	
	11					
	12					
1922	1					
	2					
	3					
	4					
	5					
	6			「雑炊」『白樺』	小説	
	7					
	8					
	9					
	10					
	11					
	12					
1923	1					
	2					
	3					
	4		18「境遇のあざけり」			
	5					
	6					
	7					
	8			「境遇のあざけり」『白樺』	小説	
	9					
	10		12「庄吉爺さん」			
	11					
	12		12「新しき日」			
1924	1			「庄吉爺さん」『青年』	小説	
	2					
	3					
	4	(6)～	29「村の生活にて」			
	5		14「叔母」〔改造〕	「新しき日」『新小説』		